



若人禍

二月のK雜誌の卷首言に老人禍と題して因循姑息唯事なかれ主義で萬事彌縫を以て一時を糊塗するに過ぎないものが老人である、老人達が第一線に立つては新興の気分は發生しない、國難打開の途は披らかれない、之を老人禍と云ふ、老人は此際第一線より退却して若人達に其位地を譲るべきである、老人禍は國家社會を災するものだから須らく自ら隱居するが可なりとの主旨を論じて居る、吾々も至極同感である、とかく老人が出しや張ると社會の進歩が停頓滯滞するのは古往今來歴史の證明する所だ、新興の社會では老人は邪魔物扱にせらるゝ

ものである、夫れは老人禍の祟りであるがしかしながら世の中は常則ばかりで行くものでない而かも老人と若人とを單に年齢で區分するとトンデもない錯覺に陥るものぞ、六十歳でも七十歳でも將來に希望を措いて日に新に日に日に新なる者がある之れに反して三十四十の若さを以て思想も古く働きも鈍く事を處するに遅々として最もスローモーションである人物が社會の重要地位に在ることが少なくない、之れは寧ろ若人禍であつて老人禍よりは其災は大であることを見過してはならない、若人禍は存外に數が多いものである。吾々は老人禍を排すると同時に若人禍の殲滅を希ふてやまなものである。(在原生)

注 本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に涉らざる限り奇想天外的の投稿を望む、一文四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

議會の品格

第六十五回帝國議會に於ての床次政友會顧問の質問演説は吾等に朗らかな感を與へたことは近來の欣快事である。由來衆議院に於ての議員の辯論は徒らに政府者を攻撃せんが爲めの攻撃語で何んとなく下品で喧嘩腰で揚足取りであつた之れに對する政府者の答辯も曲辯異言で何とかして反對議員に缺點失所を捕へられさるゝことに腐心して居る感が強いのである、眞面目で眞剣で熱誠で國家民人の利害得失を検討しなければならぬ両者が泥仕合に終始するかの觀を免かれない、夫れで吾等の地方では縣會でも町村會でも農會でもあらゆる集會では殆ん

ど衆議院に眞似て行動するのであつて偶々之を制止すると帝國議會を知らぬかと反問せられ會議の狀態は年々歳々墮落して行く有様である、鸚鵡返しと言葉、賣り言葉に買ひ言葉、馬鹿と言へば馬鹿と答ふ、頼りないと詰れば頼りないとの答、弱弱問答、禪問答之れで眞摯熱誠に議政に參與して居ると言ひ得るであらうか、畢竟するに議會

は有閑階級者の遊劇的生活構造に過ぎないと思がする、第六十五回議會は從來より幾分品よいと思はるゝが夫れでも床次顧問の辯論が際立て吾等に好感を興へたことは疑のない所である、次で町田民政黨顧問や關貴族院議員の演説も近來餘りに聞かれなかつた上品なものである。辯舌の雄必しも選良と言はれない、能辯の士が優秀な代議士でない、新聞紙上の賞讃を得んが爲のぎようせつ家が民意の代辯者でない、瞞着とごまかしと言ひ遁れと顧みて他を言ふとは爲政家の誠意を表現するものでない、殊に非常の難局に直面する吾々國民は眞劍剣

であらねばならぬ、吾々の生活はじようだんでない、議會から喜劇役者の退去を要求せざるを得ない、國家の良藥たる辯士、社會の明鏡たる智者出で、議政壇上の人とならんことを敢て望むものである。

圓タク難

(ヨシクニ)

「オイ向島の白蠟まで三十錢で行かないか」と日比谷公園近くのテイコクホテル前で流し圓タクを呼び止めたT氏は忽ち車内のヒーローとなつた、處が扉が閉ぢられないので、「君此の扉はどうかしたのか」「エー車體が最古品であるから中々しまりません其處に麻繩があるからしばり付けて下さい」「オイ君シートがムズ／＼するから其座蒲團を借し給へ」「ハハもうシートのパネが大牛横になつておるから事によると服に穴があきますから中腰になつて下さい」「馬鹿中腰になつて居られるか」「イヤ天井へソツト御頭をつけて居ればよいです、力強くす

ると天井に穴があきます、もう修繕がきかないからよいあんばいに願ひます」「コウ振動が甚しくは乗つて居られない、我日本では未曾有の鋪裝を施してあるこんな立派な路面でこどもゆれると云ふことは不可解なことだよ君」「そうでありますがもう車軸はゆがんでおるし、スプリングは錆びびびてゐるし、ゆれるのはあたりまへで路面や鋪裝とは關係がありませんやあなたの様にしゃべるのはよして下さい、先日餘りしゃべるので舌をかみ切つて死んだ御客がありましたよ」「ソリヤ大變な代物に乗つた安いと思つたらこんな危険物だつたのかい、一體警察がこんな車に許可書を與へたのがわるいぢや」「ソリヤ違ひます検査を受けたのは良い新車で四十五圓で買つたこのフォードもまだ／＼使へますから許可書だけ取かへて使つて居るです、そうあばれられては車體が壞れます客よりは車が大事であります」「馬鹿言へ、料金は全部拂ふから此處で下ろしてくれオイ車を止めるよ」「ソリヤ駄

目でサンドルが傷んできゝめがありませんからガソリンがなくなるまでスタートしたら止まりません、それにガソリンも澤山入れると洩れますから少し斗りいれてあるからもう程なくなりませす、なくなれば止めなくても止まります、御客さん安いのに良いものはありません」とT氏は夫れでも淺草橋でストツプを喰つた爲めに生命拾ひをしたとのこと、これは一夕の御話(テンシン生)

凍れるペーヴメント

所は東京で時は一月初旬の或る夜十時過ぎである、凍れるペーヴメントに冬の月が老女の厚化粧の感のする光をなげかけて居る、銀座のネオンサインは遠慮なくそのあぐどい紫や眞紅の光を放射してゐる、O君はとある料亭から小な折詰を片手にして徐ろに歩を新橋の方向に運ぶのである、折しも前方から一洋装の二十歳位の隔るスマー卜な姿の一女が蓮歩イヤ潤歩を運んで來

た、O君と行違つたかと思ふと方向を轉じてO君に向ひ「アラ先生しばらくでした」とO君はつくゞ其女子の顔を見つめて居つたが「僕見わすれましたどなたでしたかネ」随分ひどい方ねソウネもう三四年にもなりますから御忘れになられたでしょうネ妾M子ですわ」「ハハアソリヤ失禮いたしました」「御歸宅ですか其處まで御伴をしても「先生何か御飲みになりませんそれでわ此處へよりましよろネ」と或バアーに立寄つた、すると「久方振ですからシヤンペンネ女給さんフルーツを其後でクキーンカクテ」とベルモツトをたのみますよ」O君は呆然として彼女のなすまゝにして居る、やがて裏口をポケットから取り出すと彼女は、それを横取りして支拂つたのは十圓餘であつた。其家を出でて數十メートルを進むと「先生御なかは如何妾一寸オリンピックへネ」とO君亦之に随つて行つたがやがて銀座の歩道に兩人の影を投下して京橋の方へ

と歩み出した、ペーヴメントはいよいよつめたくなつた、銀座三丁目の交叉點では電氣信號器がものさびしそりに赤と青との光を放つて居るのを見てM子は「夫れでは先生今夜はこれで失禮いたします。またネサヨナラ」とO君も大聲で「サヨナラ」尾行筆者は呆然茫然中天を望めば寒月は憐れむかの様に光を放つて居る。(澁柿生)

カステーラ考

カステイラなる名稱はポルトガル語のカストボル所謂菓子と云ふ意味より由來するそうだが其の邊の所は詳でない。カステイラは其風味品格正に菓子中の王座を占むるものであると云へる、亦それだけに製造方法も仲々に六數ヶ敷くそのコツが仲々にのみこめないものだ、原料は主に砂糖、鶏卵、メリケンコ、蜂蜜等其の分量なども至極簡單なるものであるが同じ原料同じ熱量同じ時間を費しても萬人が萬人同じ様な工合に焼けるものではない。

光澤を第一の條件として適度の濕り適度の浮き（ふくらみ鹽梅）を必要とする海綿の様な断面を持ち握つて水の出る様な氣味のあるのは上等の部類である。

其の逸品は光澤、浮き、濕りよく揃ふて奥床しく人間ならば正に智仁勇の三徳を兼ね備える天晴君子の風ボウがある。即ち其の艶は人の雅量を象し其の濕度は格付を見せその浮きは潑瀾たる元氣をあらはして居る。

一概にカステラと云ふても色々種類があるが大體に長崎式東京式と二大別することが出るが品格風味共に長崎式優秀である、長崎カステラの店舗が帝都至る所に見受けらるゝも當然の事だカステラは砂糖と鶏卵との力でふくらむのであるが、往々にして經濟的關係から砂糖鶏卵をゴマカシある藥品を使用してふくらませるのが大分多いが然しそんなのに良品は出来ないカステラの生命とも云ふべき風味、品格が絶無である。

人間ならばこれ等は買收議員博士號を金で得た人々などに相當するであらふがこう云ふのがドシンドシ製造される様ではなげか

はしい次第である。醫者などは殊に吾々の大切な生命を委ねるのであるから信用の於けるのがほしい。(KY生)

あれも人の子

肌つんざく川風夜風空にまばたく星の數、散歩がてらの瓦橋の上に取りかゝつた、「旦那さん唄はしておくれよ」と足許で女の兒の聲、フト見れば八九歳計りとおぼしき女の兒、穴のいくつもあいて居るスエーターを表にまといつて居る、轉回する廣告塔のネオンの光に見れば見る程一昨年九月半の夕方行衛不明になつた啓子によくも似ておるおもざし、若しやあらぬかと心臓の血を一時に絞り出された様な氣持ちに打たれたが素より他人のそら似であつた、が去りも去り得ず橋の欄干に身を寄せて南に北に往き交ふ男女の足、箴の如く絶へ間もなき有様、小さき娘は聲はり上げて「船路はとほし、日はかげる、かげる帆かげで、泣いてゐた」と唄ひ出したが立止まつて耳をかす人は一人もない、僕は男泣きに泣かされた、これが先達の新聞に救世軍で救ひ上げホームに連れ歸つたが聖母マリアの寫眞

を見てはスカナイおばさんねと呼び神さまなんてゐるものか、此處は窮屈よと叫んでまた元のルンペンの許に歸つて夜な～寒風に吹かれながらも唄を唄つて物乞ふを自由ありと思ふ憐れ親の情も知らぬ人の兒かと思ひながら褸口取り出して五十錢銀貨を手に渡せば「おぢさんこんなにもらつてもよいか木」とひたいを凍りついたペープメントにすりつけて禮を言ふ、其の姿の一しほ可憐なのに一段と感傷的情操を呼び起された、で手をさし延べて其兒の顔を持ち上げよく見れば理智深きい様なおでこ額、慈悲に富んだ様な凹んだ目、意思強さうではなからうか、漸く我に返つて數十歩を歩みだすと足許に白き封筒が落ちておる、フト取り上げて見れば封は切られておらなしい誰れか遺失したものであらうと元の處へ捨て置かんとすれば其處には純白なハンカチーフが落ちて居ると其傍に紙入があるつめたたいペープメントよ汝は何が爲めに斯くは惡戯を試むるのか折から吹くる一陣の風に唄ひ娘の敷いておつた古新聞紙がガサ／＼と飛ん來た。(さすらひ生)